

私たちの郷土

大内氏(大内文化)発祥の地「大内」

山口のまちは、今から650余年前の室町時代、大内氏中興の祖24代弘世が防長二州を統一し、正平15年(1360)頃、大内地区から京都に似て四神相應の地になう山口へ館を移し、京都に範をとってまちづくりを始めたといわれています。その後、山口を中心に広く西日本を治め大内文化の栄華を極めた大内氏の歴史は、天文20年(1551)家臣陶隆房(後の晴賢)の謀反により長門深川大寧寺で自刃した31代義隆の時代まで、8代200余年の歴史romanとしてクローズアップされています。

この大内氏の先祖は「百済の聖明王の第三王子琳聖太子で、推古天皇19年(611)佐波郡多々良浜(現防府市)に上陸し、摂津国荒綾(現難波、四天王寺)に上り聖徳太子に謁し、周防国大内県を賜り下向、ここを本拠として多々良氏を名乗り、子孫が相受け継いだ。」と伝えられており、この「大内県」こそ、現在の大内地区を中心とした地域にほかなりません。そのため、大内地区には、大内氏の氏寺や氏神をはじめとする大内氏にまつわる貴重な歴史文化遺産が数多く

残っています。また、私たちが親しく呼んでいる「大内氏」の姓も、寿永2年(1183)頃16代盛房が周防権介に任じられて以降、領国「大内(県)」の名前を世襲して「大内氏」と名乗るようになったものです。

大内氏の始祖琳聖太子の創建と伝えられ長4年(827)11代茂村の頃に氏寺となった氷上山興隆寺の「二月会」をはじめ、嘉元3年(1305)22代重弘による創建と伝えられ、後に勅願寺とする論旨が下された臨濟宗の古刹乗福寺の「五山文学」、仁平元年(1151)創建と伝えられ、24代弘世のとき仁王門や五重塔が建立され、本堂供養日記に文献上の初出としての狂言「十一番狂言山伏説法」が催された仁平寺の「舞楽舞踊」は、大内文化の礎としてここ大内地区で生まれ、その後栄華を極めた大内文化の発展の中心的な役割を果たしてきました。

私たちは、豊かな歴史に恵まれた大内氏(大内文化)発祥の地「大内」を郷土として誇り愛着をもち、貴重な歴史文化遺産とともに後世に伝えていきたいと思います。

編集後記

私たちの住む大内地区(旧大内町)は、山口市の仲間入りをして今年5月1日で50年の節目の年を迎えます。市内でも数少ない人口増加地区で、現在、人口2万3千人、9千3百世帯を超える市内2番目のマンモス地区に発展し、公共下水道の整備、住宅団地の開発等が進むなか、住居表示の実施も計画されています。

その一方で大内地区の貴重な自然・歴史文化遺産が失われつつあることから、その反省を踏まえ、今一度、私たちの住む郷土大内の歴史文化を振り返り、「大内氏(大内文化)の発祥の地」、「維新の策源地」としての大内地区の歴史文化遺産に目を向け、うらかな晴天の史跡散歩に役立ててもらおうと、このマップを編集しました。